日本大学

大学史編纂課だより

第10号　2016年3月7日　発行

目　次

学祖関係調査報告
◇明治15年　学祖の平和街道開通式臨席…… 2
◇明治初期の学祖書簡について…… 4

連　載
◇終戦と学徒　後編②…… 6

「平和街道開通120年」記念碑

岩手県北上市と秋田県横手市（黒沢尻―横手間）を結ぶ道路が平和街道です（国道107号）。現在では「へいわかいどう」と呼びますが、建設当時は、岩手県平鹿郡と秋田県和賀郡の郡名の頭文字をとって「ひらわかいどう」と呼ばれました。

明治政府が推進した殖産興業政策による東北地方開発の一環で、明治13年（1880）7月平和街道の開削工事が開始され、15年10月に全線が開通し、27日の落成式を迎えました。

当時内務卿であった山田顕義が両県の懇請により、北海道視察の帰途、開通式に臨席しています。このとき山田が詠んだといわれる歌が刻まれています。

ひらけゆく　道さかえんと
松ヶ枝は　幾千代かけて
いろもかはらぬ

記念碑は、平成14年10月、岩手県和賀郡西和賀町巣郷の秋田県との県境に建てられました。

「いわて・あきた県境国取り合戦」

記念碑の向かって左手に「岩手県・秋田県県境」の杭がありますが、この場所は「いわて・あきた県境国取り合戦」が行なわれる会場になっています。

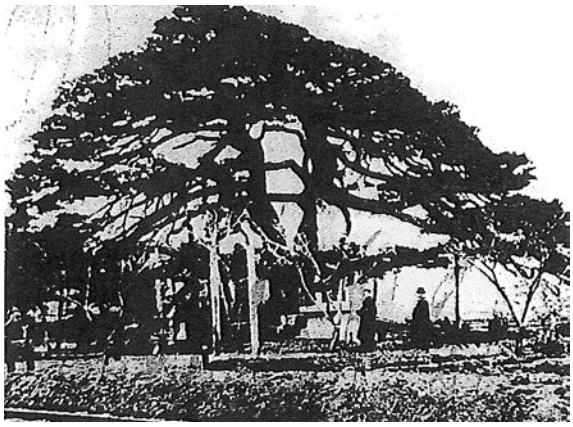
地元西和賀町巣郷地区と横手市黒沢地区の交流の一環で、3本勝負の綱引きを行い、勝った方が国道107号にある県境杭を相手側に50cmだけ移動できるという催し物で、これまでに7回を数えるそうです。

明治15年　学祖の平和街道開通式臨席

学祖山田顕義の平和街道開通式臨席は、公式的には伝えられていません。この年9月北海道視察のため横浜を出帆した山田は、函館・根室・札幌の巡視を経て、10月22日夜半、函館から芳野丸で青森に向けて出発します。青森からは陸路帰京し、途中、竣工間もない福島県の安積（あさか）疎水を視察したことまでは判明しています（高瀬暢彦「明治十五年　山田の北海道視察」(1)（2)『シリーズ学祖・山田顕義研究』第五集)。すると、福島行の前に平和街道開通式に立寄ったということになります。

青森から平和街道開通式式典が開催された和賀郡巣郷（すごう）までは、奥州街道を南下し黒沢尻（岩手県北上市）で完成したばかりの平和街道に入り西に進むコース（地図赤線）をとったと思われます。平和街道は全長66kmで、県境にある巣郷は黒沢尻から47km程に位置しており、式典を終え、街道を逆戻りして黒沢尻から奥州街道を再び南下して福島県に入り安積疎水を視察することになります。移動手段は馬車だったと考えられます。巣郷まで片道47kmの往復はかなりの負担ですが、山田は政府の要人ですから、安全をとり整備されていた奥州街道を使ったと考えるのが普通です。

別コースの可能性は？　それは、秋田県内の羽州街道を利用し土崎（秋田市）を経て横手に至り、平和街道を東に進むコース（地図緑線）です。そもそも山田の北海道視察は、感慨深いものでした。明治2（1869）年、官軍を率いた山田は土崎に上陸して陸路北上し青森に至り、ここから函館に渡り、五稜郭に籠もる旧幕府軍を落とし戊辰戦争が終結しました。山田にとっては、新時代の幕開けを確たるものにした忘れがたい地です。その北海道視察を終えた山田が、思い出の地に寄りながら式典の地巣郷へ向かい、その後は平和街道を東へ進み、奥州街道に至るほうが合理的と思われます。


昭和36年の台風で倒れる前の笠松（北上市）

ところが、山田が式典で詠んだ歌にある「松ヶ枝」の松は、和賀町横川目の平和街道沿いにあった雌雄の松を指し「笠松」の地名の発祥地であると解説されているのです。(『平和街道120年記念誌　平和と交流ゆるぎなく』)。和賀町横川目という場所は、黒沢尻と巣郷の間にある地名（●印）で、つまり羽州街道コースをとると、式典の時点では、山田はこの松を見ていないことになります。となると歌は詠めないので、やはり奥州街道コースだったのでしょうか。

（田渕）

角館町 「文学博士圓谷弘先生頌徳碑」の現在

角館（かくのだて）町（秋田県仙北市）は、大正時代に高等工学校（理工学部の前身）の設置、社会科・美学科（芸術学部の前身）など特色ある学科の新設に手腕を発揮し、日本大学の総合大学化に貢献した圓谷（つむらや）弘の出身地です。圓谷の功績を伝えるため、昭和38年、同郷の古田重二良会頭が同志を糾合し本学校友会秋田県支部によって碑が建てられました。

記念碑は、観光客で賑わう角館武家屋敷通りの東勝楽丁の公園内にあります。

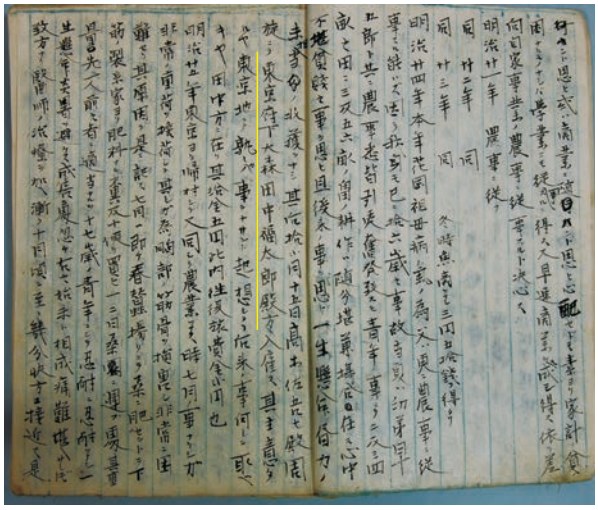
（田渕）

東京遊学以前の山岡萬之助

第3代総長山岡萬之助は、明治9（1876）年4月に長野県諏訪郡湊村（現 岡谷市）の農家に生まれました。明治19年に優秀な成績で小学校を卒業しましたが、経済的な理由から中学校への進学はできませんでした。しかし、勉学をあきらめた訳ではなく、家業の農業・養蚕を手伝いながら、小学校校長宅に通い漢学などを学んでいます。そして、いずれ東京への遊学を夢みて、冬は海苔屋への出稼ぎ、夏には製糸場で働き学費の捻出に努めました。

諏訪地方は、江戸時代から冬の出稼ぎとして、浅草・大森の海苔仲買商への奉公や、全国への海苔行商がさかんに行われていました。出稼ぎ仲間は、諏訪明神の信仰を精神的支柱とする「御湯花講」を結成し、団結を強めています（宮下章『御湯花講由来』）。山岡の「自伝草稿」によると、初めて東京に出たのは、明治24（1891）年に高木佐吾七（諏訪小川）の紹介で、大森の田中福太郎（田中屋）に雇われた時です。山岡は、この時の目的について、「東京地ニテ孰レカ事ヲナサント起想シタリ」と述べています。東京への出稼ぎは遊学のための第一歩となっていたのです。

明治26年には独立して海苔の営業を行うようになり、28年から29年にかけて、日本橋海苔問屋の窪田惣八（山形屋）、津島儀助（川口屋）、松本彦太郎、井上寅吉の依頼を受け、千葉県に海苔の買出しに出向いています。明治29年12月から30年3月までの間、海苔株式会社にも勤めています。一方、夏には岡谷の製糸会社で働いています。明治26年夏に平野村の笠原房吉が経営する蚕糸場に雇われ、明治28年には湊村の濱半三郎の蚕糸場で会計の仕事に従事しています。



幼少期から司法試験合格までを綴った山岡の「自伝草稿」
（山岡記念文化財団蔵）

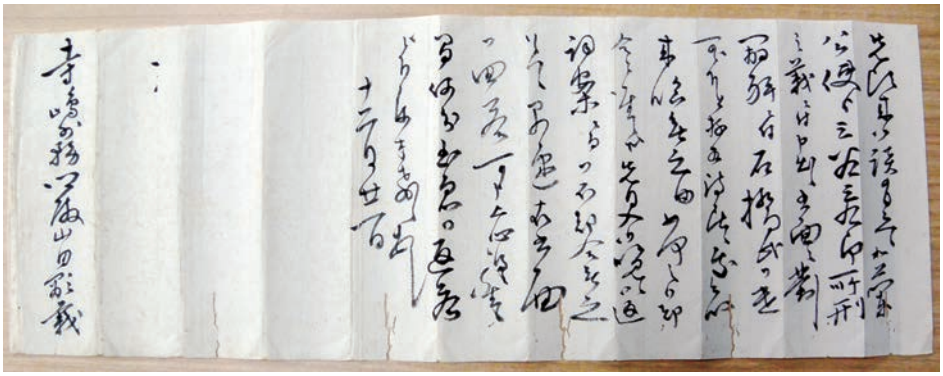
このように、苦心して学費を貯めた山岡は、明治30（1897）年、いよいよ勉学に専念するため上京しました。東京遊学以前の山岡については、分かっていないことが多く、今後さらに調査を進めたいと思います。

（小松）

明治初期の学祖書簡について

平成27年12月12日、神奈川県横須賀市在住の久保正彦氏が所蔵する山田顕義の書簡を日本大学会館で撮影しました。正彦氏の高祖父にあたる久保成（しげる）は信州（長野県）松代藩の藩士で、蘭学者として著名な佐久間象山の門弟でした。ご自宅には獄中の吉田松陰が象山に宛てた漢詩なども残されています。

今回撮影した書簡は、外務卿であった寺島宗則に宛てた山田の書簡です。オランダ公使から三谷三九郎の処罰に関する書面が届き、それに対する回答案を作成したので、確認の上、至急回答が欲しいという内容です。



寺島外務卿宛　山田顕義書簡

この書簡自体は、所蔵する久保家とは直接関係はありませんが、久保家には他にも10数点の明治期の書簡が所蔵されています。作成者と宛先は書簡ごとに異なりますが、これらに共通するのは、宛先が外務省関係者である点です。おそらく、久保家の先祖の方が外務省で勤務していた人物の家から譲り受けたのではと考えられますが、象山の門人で松陰の書簡も残されている家に山田の書簡も保存されているのは、何か不思議な縁を感じます。

この書簡の文中にある三谷三九郎という人物は、あまり名が知られていませんが、長州藩御用達の商家で三井、小野組に比肩する江戸屈指の豪商でした。明治期には官金出納業務を取り扱いますが、明治5（1872）年に三谷家の手代が水油投機に失敗して、官公預金30万円を損失してしまいます。さらに損失を取り返そうと東京商社、オランダ商社から水油を担保に借金しますが、油価格が暴落したため返済不能となり、さらには二重担保が判明したため、ついにオランダ商社から提訴されて破産に追い込まれました。同時期に起きた山城屋事件とならび陸軍省の公金費消事件として有名な事件です。

三谷三九郎の事件については、明治6年5月8日の神奈川裁判所の判決によって、敗訴した三九郎は水油の売却を命じられますが、これを不服としたオランダ商社は司法省裁判所へ上告します。明治7年2月に上訴審が開廷し、同年12月7日に判決が言い渡され三九郎の全面敗訴となります。

今回の寺島宗則宛の山田顕義書簡は、「12月21日」と日付が記されていますが、作成された年は記されていません。しかし、前述した三谷三九郎事件に関する内容であるため、おそらく明治6年または明治7年作成のものと考えられます。

この頃の山田は、人生の転機を迎えていました。岩倉使節団による欧米視察を終えて明治6年6月に帰国した山田は、徴兵制をめぐり陸軍卿の山県有朋と意見が分かれます。7月には東京鎮台司令長官に就任しますが、これは事実上、陸軍省の中枢から外された人事で、さらに11月には、清国在勤特命全権公使に任命されます。これには、山田も同郷の先輩である伊藤博文に対して「大当惑千万」と不平を洩らし、清国への赴任を見合わせていました。この様な状況下の明治7年2月、佐賀の乱が発生し、山田は大久保利通に随行して反乱鎮圧に向かいます。平定後の5月に帰京し、7月には司法大輔に就任して、以後、近代法整備事業に関与していくこととなります。

今回の山田顕義作成の書簡では、三谷三九郎事件について、オランダ公使への回答という場面で山田が関与して

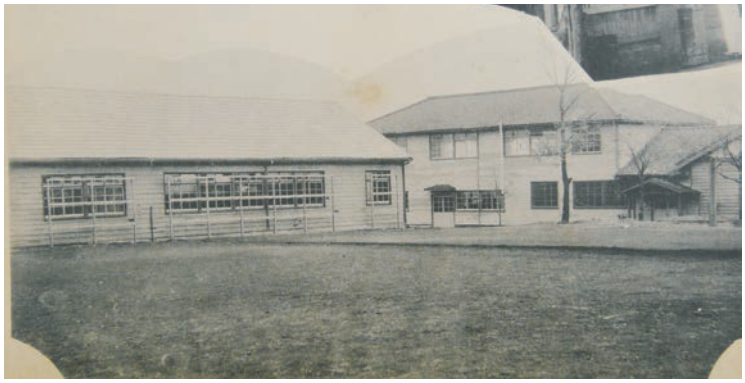
いることがわかりました。この書簡が明治6年作成である場合山田の官職は清国在勤特命全権公使であり、清国には在勤していないものの外務省の一員として本件に関与したと考えられます。また、明治7年作成である場合には、山田は司法大輔であったため、司法省側から外務省へ確認した内容の書簡となります。今後、他の関連資料によって正確な年代が判明するかもしれませんが、いずれにしても、山田が司法へ転身する時期の動向を伝える貴重な資料といえましょう。

最後になりますが、快く撮影に応じてくださった久保正彦氏に御礼を申し上げます。

（松原）

【参考文献】村上一博「近代的代言人の登場　―児玉淳一郎と中定勝―」（『法律論叢』第70巻第2・3号所収、明治大学法律研究所発行、1997年11月）

三軒茶屋キャンパスの原点は…



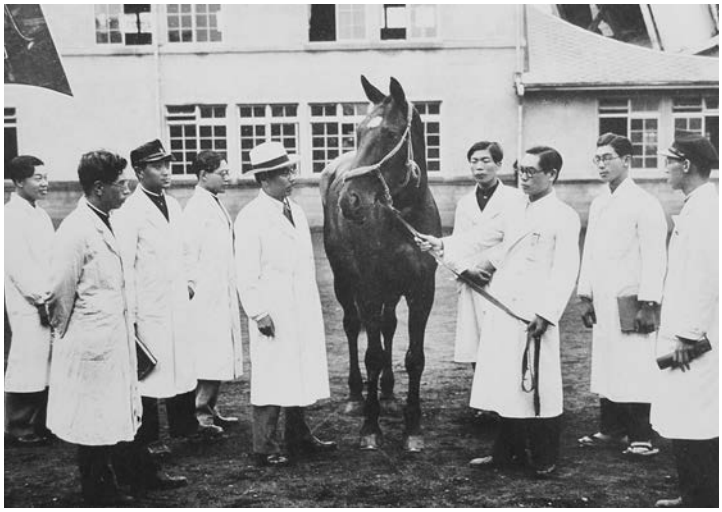
世田谷区下馬の東京獣医畜産専門学校校舎
（第18期卒業アルバムより）

平成27年6月、「東京高等獣医学校（第6期　卒業アルバム）」（昭和13年3月）及び「東京獣医畜産専門学校（第18期　卒業アルバム）」（昭和24年3月）を入手しました。

明治40（1907）年に創立した東京獣医学校は、昭和5（1930）年に専門学校設置の認可を得て、東京高等獣医学校を設立しました。私立で最初の獣医学専門学校です。校長には予備役陸軍獣医総監（中将相当官）武藤喜一が、理事長には日本大学常務理事の加納金助（後に日本第一学園初代理事長）が就任しました。その後、教育制度の変化により、東京獣医畜産専門学校、東京獣医畜産大学へと改編します。

昭和26年11月、農学部の校地を都内に求めていた日本大学と、施設設備の充実が課題となっていた東京獣医畜産大学は合併。27年3月には、日本大学農獣医学部（平成8年生物資源科学部に改組）が設置されました。東京獣医畜産大学の校地は世田谷区下馬にあり、平成28年度開設の、危機管理学部とスポーツ科学部が使用する三軒茶屋のキャンパスとして引き継がれています。

（髙橋）



馬学実習（第6期卒業アルバムより）

終戦と学徒　後編②

陸軍特別操縦見習士官軍装　昭和19年8月
（佐々木晃氏蔵）

日本大学名誉教授の佐々木晃は横浜市出身、飛行機が好きな少年でした。日本大学第四商業学校（後の日本大学高等学校商業科）から専門部商科に進み、日米開戦を迎えます。

開戦から数日後の軍事教練で、配属将校の矢田晴好大佐から、制空権の重要性とアメリカ軍航空部隊の優秀性について聞かされ、佐々木は、優れた戦闘機とその操縦者の必要性を痛感しました。そして、昭和17（1942）年4月のドゥーリットル陸軍中佐による日本本土初空襲を体験したことによって、時機がきたら航空部隊に志願する決意を固めました。

昭和18年10月、法文学部法律学科に入学。翌19年3月、第3期陸軍特別操縦見習士官の募集があり、両親には内緒で受験し合格しました。5月、籠原の熊谷陸軍飛行学校第3地上準備教育隊に入隊。8月には長野県の同校上田教育隊に転属し、本格的な飛行訓練を受け、望みどおり戦闘機適任者に選ばれました。12月に基礎飛行訓練を終えると、希望した南方派遣組に選ばれ、大晦日に門司港埠頭に集結。佐々木は、タンカーなど10隻からなる「ヒ八七船団」の1隻「海邦丸」に乗船しました。航空要員の目的地は、ジャワ島の前線に展開する航空部隊でした。

上田教育隊での飛行服姿　昭和19年9月
（佐々木晃氏蔵）

年が明けた昭和20年1月9日、台湾海峡でアメリカ機動部隊艦載機による空襲を受け、乗船は大破します。佐々木は約7時間漂流し助けられましたが、多くの学徒兵が波間に沈みました。「海邦丸」の生存者は、そのまま台湾の第8飛行師団に転属、3月には特別攻撃隊員への志願を命ぜられました。しかし翌月になって特別攻撃隊員を免ぜられ、代わって配属されたばかりの少年飛行兵出身者たちが命ぜられました。5月、第102旅団司令部附となって、6月には特別操縦見習士官から兵科見習士官に転科となりました。

上田教育隊の正門跡（現 上田千曲高等学校）

終戦の数日後、旅団司令部に集合させられた見習士官たちに、陸軍少尉任官が告げられました。

（髙橋）

【参考文献】佐々木晃『学徒兵の航空決戦』（光人社、2006年12月）

全国大学史資料協議会2015年度総会ならびに全国研究会

押川記念ホールでの全国研究会

平成27年10月7日～9日、全国大学史資料協議会の総会が東北大学片平キャンパス、全国研究会が隣接する東北学院大学土樋キャンパスで開催されました。

初日の総会後は、宮城学院の前身である宮城高等女学校の学徒勤労動員調査などを題材に、大平聡氏（宮城学院女子大学）による、「学校資料の保存と活用」と題した公開講演が行なわれました。

東北大学に残る
旧制第二高等学校の門柱

2日目の全国研究会は、「『戦後70年』と大学史資料」をテーマに、河西晃祐氏（東北学院史資料センター）・折田悦郎氏（九州大学大学文書館）・都倉武之氏（慶應義塾福澤研究センター）から、学徒出陣をはじめ、各大学における戦時期に関する調査とその公開などの現状について報告がありました。その後の総括討論では，フロアの参加者からの声も含め、活発な議論が行われました。

3日目の見学会では、午前は東北大学片平キャンパスに残る歴史的な施設、午後には仙台市博物館を見学しました。

法政大学での学徒出陣シンポジウムに参加

平成27年11月23日、法政大学学徒出陣調査中間報告会「戦後70年　法政大学と出陣学徒――記憶と記録」が開催されました。法政大学では、平成24年度から6年計画で全学的な学徒出陣調査を実施しており、その様子はマスコミにも取り上げられています。

（法政大学史センター提供）

このシンポジウムでは、第1部は法政大学史委員会委員ら4名による調査の中間報告が、第2部では慶應大学・専修大学・日本大学の調査担当者による、各大学の取り組みの事例報告と、法政大学史センターの調査担当者を交えての総合討議と質疑応答が行われました。

日本大学からは、当課の髙橋秀典が第2部のパネリストとして参加しました。大学により、これまでの調査状況・現在の調査体制などに違いがあるものの、個々の取り組み事例には参考となる内容も多く、有意義なシンポジウムでした。

皆様のご意見をお寄せください

刊行物に関するご意見・ご要望
大学史に関する問合せ先

日本大学広報部大学史編纂課　E-mail:nuhistory@nihon-u.ac.jp
TEL　04-2996-4555　FAX　04-2996-4592

活動報告

平成27年 4 月～ 9 月

○調査研究

5 月15日～16日	上條愼蔵関係資料調査（長野県上田市及び松本市）
6 月 3 日	全国大学史資料協議会東日本部会総会（早稲田大学）
6 月10日～11日	学徒兵関係史料・史蹟調査（福岡県朝倉郡筑前町及び福岡市）
7 月24日	全史料協関東部会第281回定例研究会（松本市文書館）

○展示・普及

4 月19日	商学部オープンキャンパスでの大学史展示（商学部）
8 月 1 日～10月 1 日	特別展示「小唄『かざをりゑぼし』と山田顕義」展 （長良川うかいミュージアム開催の展示に出展協力）

○講演等

4 月 6 日	日本大学理工学部（同学部スポーツホール）
4 月 9 日	日本大学東北高等学校（磐梯熱海温泉「華の湯」）
4 月21日	日本大学国際関係学部（8号館講堂）
4 月24日	日本大学豊山中学校・高等学校（同校アリーナ）
4 月23日	日本大学鶴ヶ丘高等学校（同校体育館）
5 月 7 日・14日	日本大学商学部（1501・1503・1601・1602教室）
8 月 1 日	長良川うかいミュージアム市民講座（同館）

大学史編纂課だより
第10号
2016年3月7日　発行
編集・発行　日本大学広報部大学史編纂課
〒359-0003　埼玉県所沢市中富南4-25
TEL 04-2996-4555　FAX 04-2996-4592
印　　刷　株式会社 文成印刷

（2016.3.7　11000）